

《正岡子規（36）の続き》その312

天涯茫茫

列伝⑦ 岡 麓 の 続

書簡番号 796 32年11月13日発

空晴しけふの日和に家を見に午後より

行ん香取氏も行ん

本郷区金助町一に、麓が新築した家を見に行くために出したはがきであるが、13日の朝に執筆して投函したもの。それが午後には、受取人が入手している。当時の郵便事情の早かったことを想像させる。

香取秀真にも同行をすすめるはがきを、矢張同日の朝に出している。文面は次の如し。

「今日午後岡氏の新築見に出掛申さんかと存候 貴兄も御出掛ありては如何 但午後の事」

秀真の住所は小石川区原町十六番地である。この頃、子規はかなり病状がよかったとみえ、しばしば外出し、他家を訪問している。

11月13日に次いで16日には香取の家に鋳物造りを見に行っている。

香取はのち東京美術学校教授で、鋳金を教授し、文化勲賞を受けた。

香取の家では、子規に牛肉を饗応した。

牛ヲ割キ葱ヲ煮アツキモテナシヲ

喜。居。ル。ト。妻。ノ。君。ニ。言。ハ。我。口。ヲ。觸。レ。シ。器。ハ。湯。ヲ。カ。ケ。テ。灰。ス。リ。ツ。ケ。テ。ミ。ガ。キ。タ。ブ。ベ。シ。

結核が結核菌により感染するものであり、子規が結核患者であることは、周囲の人は知悉していた。本人ももちろん承知していたから、香取宛のはがきの二首目には特に全文字に〇の圈点を附して注意をうながしたのである。

それにも拘らず、多くの人が子規をよろこび迎え、また子規庵を訪問し、時には寝泊りするほどであったのは、子規の人柄の好ましかったことによるのであろう。子規は目下の者にも決して高ぶらず、教えたり指導するにも、懇切丁寧を旨とするのを常とした。

書簡番号 873 33年5月5日発

歌人を花と、忠臣蔵の役柄にたとえた文面だが、小生にはチト解しかねるので、取り上げない。

書簡番号 883 33年6月10日発

6月3日、岡宅で園遊会があり子規も出席した。その席上での長歌を至急郵送してほしいとある。

書簡番号 929 33年10月15日発

「拝啓 明十六日午後四時頃より興津一件二付御相談致度御閑ならハ御光来被下間敷や右御願まで 不悉」とあるはがき。興津一件とは、伊藤左千夫が云い出し、子規も大いに乗気になった事件である。

子規は移転の利害を箇条書きにして検討し、温暖なこと、来客を謝絶し得ることなどの利点から移居に傾いたこともあった。しかし内藤鳴雪の大反対もあり、漸次移転せぬことに決定したのであった。

16日の最終決定の会の出席者は、左千夫・碧梧桐・虚子・麓の四名であった。

移居の可否を決する重大な会に出席を乞うというのは麓の人物にかなり重きをおいている証であろう。碧梧桐や虚子のような古くからの友人にまざって評議するには、その人物の識見が重んぜられたのである。

書簡番号 946 33年11月29日発

「明三十日煖爐掘付祝として左千夫君をも招き候二付夕飯くらひ二御出掛被下間敷や」寒がりの子規のために友人たちは、防寒の方策を種々講じた。南側の障子をガラス戸にして陽光の射すようにし、32年冬からは石油を用いる燈爐にし、煖爐にして石炭を用いるようにしたのは33年冬からである。

ガラス障子は虚子、燈爐はホトトギス社、煖爐は左千夫の寄進によるものである。

この書簡の末尾には「甚だ失礼なれども青木堂の西洋菓子三四十許御買求御持参被下まじくや 無礼の御頼如此候」と書いた。

青木堂は帝国大学脇の西洋菓子屋だが、麓が買求め持参したものはシュークリームがはいっていなかったもので、子規はとても残念がったと麓の記述にある。